

琵琶歌

明音
確譜

續編之三

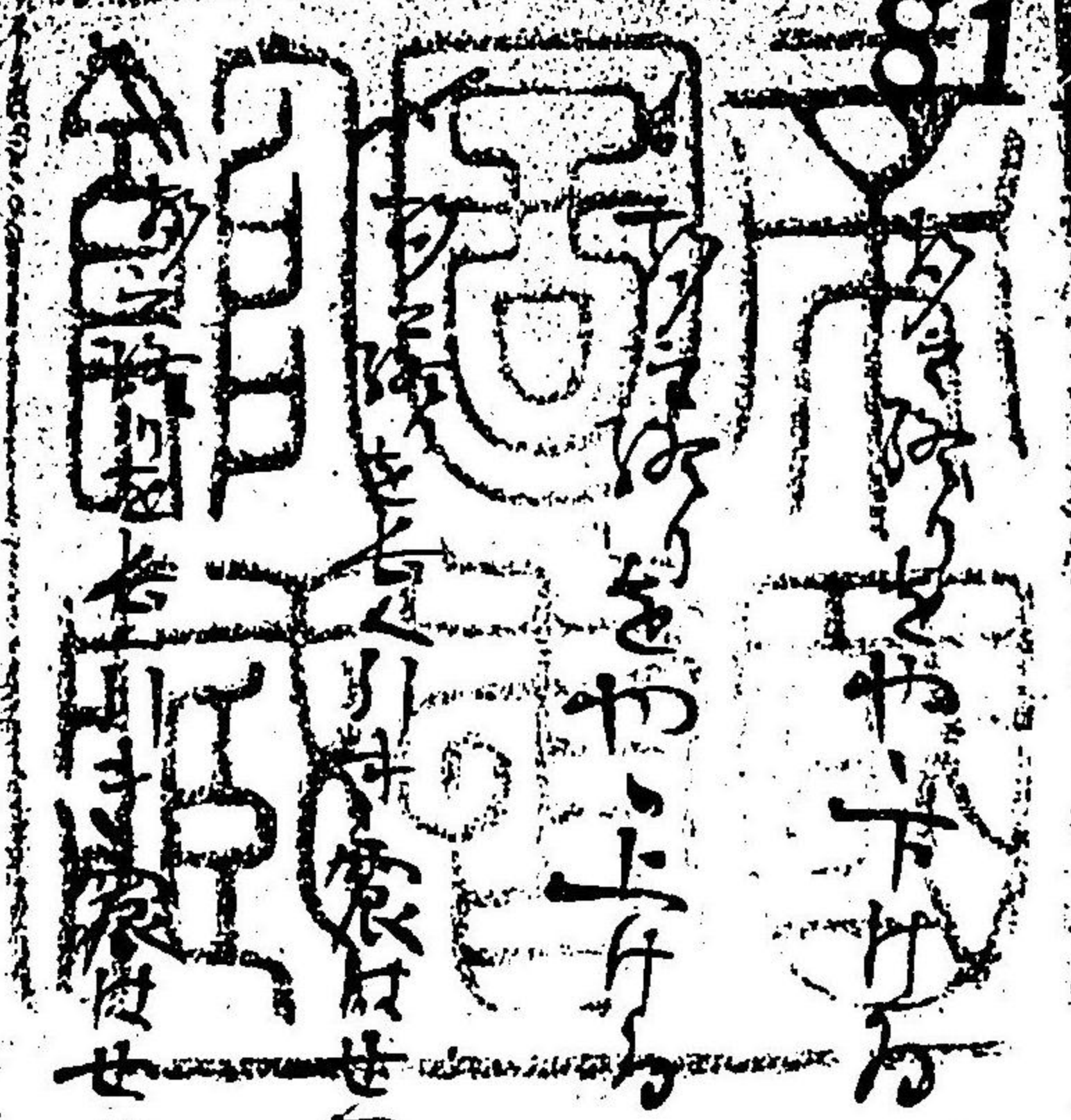
全	全	全	全	辨之內侍
三段	二段	形見櫻初段	俊寬上段	櫻井之驛
		行矣二章	毒饅頭	
		故野日寧齋先生	雲のまのき	

253

119

譜系

特65



明治
20 3 16
肉交

一 此の譜系は古くは中世に於て其の形を以て

X 地勢の變化

一 此の譜系は古くは中世に於て其の形を以て

一 此の譜系は古くは中世に於て其の形を以て

暫し一程見送く

二

あめ別きの村時雨

きりこころこころこころこころ

曇りやすき日是非もあ

大千ののののののののののの

路下河内守左衛尉楠公行け

のののののののののののののの

天下の安老を身じとら

のののののののののののののの

思ひあつて美吉野

のののののののののののののの

吉野の宮を召され行へ

次は平二年はすのまゝ空

此の世はふ木の葉はた

霞たけちる玉箒

消えぬ争ふ族部堂を引見

急なけりふる石川や

何と騒くらん群干鳥

帝音はるのふたより

俄にさるる馬の夫叫

敵の味方の伏勢

風下漸く駒と入

山下道を見送せ

三

十電光石火切り結び

高天原狼籍はき叫ぶ

乙女之妙のたまはらけ

必定曲者出てたりふ

崩し△△△△△△△△△△
いそや弱き奴助けやり

強きとてしんまんつて

馬上の正行最先に

又た切りて切てり

前より切り後より

△△△△△△△△△△

突き身まうそにそに

△△△△△△△△△△
あをを拂い逃るが由に

縦横を盡し難立り

△△△△△△△△△△
別手電飛雷の早業を

△△△△△△△△△△
その執力はよるに

阿修羅王の荒みたる如く

△△△△△△△△△△
獸王獅子の狂るに似たり

吟唱
聖分の中へ女郎衣

おきけぬと救けり

● 田代の御所にて上り

● 其の御所にて御守護あり

● 吉野の宮に歸り行くと

● 赤内侍の後の袖

● 湯の川は湯の御所あり

● 悲喜交々の後あり

● 侍居帝に奏すらん

● 逆賊高師直の御所あり

● 思ひきり

● 赤内侍が奪いとらんと企て

● 既に石川の辺に

● 軍卒あまたら圍み

● 虎口危く見えけるを

● ゆきの赤もなかり

● 危難に救いしむらせ

● 赤

● 赤赤と帰館ありけり

● 傳はるるものとあり

● 帝は赤一葉赤の御所あり

● 七

汝心行をくらしむ

いふ口惜しむらふし

好まざる助け候じ

内侍を心行に賜はせし

中
詔しこ下されぬ

何思ひ上りし

御心いふ

ふらふら身
の影をいふ

と

奏し上りし

あ、味気なみの

身はもき右少辨俊基の

忘れられたみの

掃の色は深みより

結し結々姉と

えんりの糸の

新りー甲斐も水の泡

消えあけ消えぬ心のか

一〇

時雨とてき松を

清き雪には色ゆる

習ひとあつた君は

あや仮初のおろ

言ひ捨てし心

そちには深き故あらん

問はぬし問ふも

いと事なほ

あつた半のおこ

年の内待は

戀路の闇に踏み

くはの逢瀬を

跡を暮暮りて行は

あけそもあは

心行は初

あつた入るに

あつたあつた

一

其の黒髪を切りす

一

如意輪を奉り

すてのりて鑑

塔の扉に美人

辞世のあはれ

のりて思えは

あはれに

い

ねは赤ま

のりて思えは

ねのあはれ

のりて思えは

ねのあはれ

のりて思えは

ねのあはれ

のりて思えは

ねのあはれ

のりて思えは

一三

死なば未来に彼のみぞ
一四

ひより蓮のまの上

大寺ののののののの

各留半座乗華台

待我箇浮同行人

短き杖を契りまは

結いひたる携しは

帝マ申為め君のたゞん

我身我のこや返一せん

大君のつゝまふあそびは
こゝに染むら墨染の袖

誠あらはらなむ

空ろくあはれとん

況んや心り本るにあらす

今や決死の出陣に

契らぬ事の真心成

身はつまみれて流るは

断腸の思ひやう清く

ふひの者てけしなる

我事さすまゝさるる也

鑢の袖を濡りけり

俊寛上段

あたたまる

筑波のけるの薩摩子瀉

鬼界の島のあら磯に

治承元年夏五月

流され給ひくは

右近衛之少将生経

檢非違使平之入道康頼

法勝寺の執行

俊寛僧徒の三人あり

夏寺艱難なけ島に

送る給ふ其の中

大救の命が予傳らる

思ひしにめ事さすは
一ハ

あら難有ま御説やと

三入ひりくとひさし

いやく敷と令状哉

相戴きて本経は

う判も涙に袖ぬき

中平
聲もふるくささら

讀得給はぬあつたま

康軟よりてやしく

讀み上げ給ふ報け

大平○○○○○○○○

えは中宮中産の祈禱

非常の大赦行けるに

息界ヶ島流人のい

本経康軟は赦免すと

讀み給ふ時俊寛は

あつと驚まし歌をあけ

何とて某の名は

讀み給ふ給ふそと

言葉せばと問答す

康頼も打ち登馬まじりたり

実におふ可し事なまじり

御名は更も見え侍らす

俊寛はついで

ねては筆者の諱りの

ふに

後ませ給ふとありける哉

使の元康はついで

某都より承り候

御経康頼の二人は中供致せ

俊寛はついで

跡に申せとの御事あり

おははめぬ可事なり

罪も命と配下成今

非常も命と大教あり

しるす哲多のあみにも

後七は可や國果さや

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

○メカニシテ

十美より一美の心 二四

獨り涙に身をまかせ

玉兔晝眠雲母地

金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱ニ古木ヲ

鳴キ盡シテ不レ回頭ヲ

く

ふ詩の心は

俊寛僧都之身の上

清心ニ思ヒ入ル入ル入ル

全 下段

去程ト

時刻ニつクアリまシけル

揮子の言無事トせルまシけル

名喚け更ニまシけル

本経に有ルの念ヲを

康軟け法華經一卷と

二七

各々の身にありては

さすい慰心火泰らせり

きりこころいしりしりし

船に乗らんりしりし

大千〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

俊寛袂もすりつ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

私といふことありは

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

世々いかにある地まはるる

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

情心のせりしきさへ

涙を袖もつみ〇〇〇〇

のたまふおん終らぬ

哀きやせしけの禪子の

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

権を振りあげりたさす

俊寛のけりしけりし

すゝめ袂の手が放ち

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

陣はあきらむせし

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

禪子のせしけもえ康の

二七

二六
奴心と言葉もいふことなき

まゝの筆のて出ぬの

恨にう付りてを

楫子も恨ぢひを切つ

飛をみかみ押す

是方浪におろしきみ

私を恨むと平はき

すす摸様もあらは

力及けす一俊實は

もろの清んひき

のの松浦さゝ姫の

敷まも赤ん及け

悲しみ治りも哀き

時を感ふ

春も涙をま

別をおひ

鳥心女動かす

人

あつた別々の悲しみ 三。

中干

知らぬ者あつたらぬ

さすは本経に康頼も

波あつたらぬ 報き

我輩京都に上りて

善の手様ん ちりあつて

ちりて申迎ひた ちり了」

心強く待たせしめ

中干

宜ふ妙もすゝめあつ

たのみを濱のまじりて

妙もいれたとつ浪の

とするまじり 後實は

中干

妙も手合せ報きとす

平一ツの妙も評ふ妙も

次妙もつれは 報き

妙もすゝめ人につれ

清えて見えなくあつたけり

清えて見えなくあつたけり

三

形見櫻 初段

久方々

雲井小高と照る月夜

満つきは欠くる朝しあり

あはれ

人のあはれを賢察は目も寄ら
ず
け理の例ははたしむる歎は

大平の○○○○の○○○○の○○○○
平は高都之城律集院源次郎忠真は

鳥津の重臣とて

庄内八条石を飲

栄を榮華はけり

父孝侃。欲心の余りや

反逆を企て

君の御手と汚る世話と

悴源次郎忠真は父の逆意は

次は慶長四年潤二月下旬

庄内都之坊に立籠る

山田安永志和地の坊

高坪財部野之坊

梶山勝云上の口

梅北恒吉味吉まこ

都合十一の坊を構

籠の雲か起

虎の風を呼ぶ勢なり

白石永仙を初と

初答院左近伊集院新右衛門之尉

比志島式部少輔

倉野七兵衛之尉

猿渡肥前之守

伊集院嘉門之介

伊集院兵部少輔忠能

忠貞の弟

伊集院小傳次業成之守

中干

都合其勢二条の余騎

けるくし馳せ集り

籠城之用意ありて

島津屋敷に方敷引とてのしんあは

公少司

以ての外に中腹をこころし

其儀あらけ

早く討手取ありて

源次郎忠貞其の首をば取

実檢に備へての申候は

御ちとあつたて手配あり

軍旅之指揮をすし給ふ

茲にまゝ

北郷作佐五郎の尉三人は

北郷七千代丸が引とて

お千余騎を従へ

都合其勢十余余騎

甲之星を冷天に揮り

旗を物を見んひらり

先二一五八

三九

島津中務少輔忠豊

新納武彦守忠元

樺山權左衛門久高

喜入摂津守忠政

長壽院之盛淳

山田心藏押川強兵衛

村尾源左衛門松吉守初久

物カタ志カタ志カタ左カタ衛カタ門カタ松カタ吉カタ守カタ初カタ久カタ

今二六月上旬吉日に撰けり

公の御馬を出せ給ふ事

ナキ
ナキも勇々お見えんける

ナキもお見えんける

平田三左衛門宗次

平田三左衛門増宗の息男

今二三三の秋の月

XXXXXX
雪乃が出来る風情あり

尚妖艶小麗麗々々々

三九

容色無甚の少年あり

目。

吉田方病は家や

兄弟の契りははす人

昔は古所は出たより

片時も側を相去らうす

征鞍山踏成今る日候

命と迷ふ馬蹄やちり

軍旅神おら屯せは

今床やちり枕

XXXXXX
よも詠ちるね事や月

況もや名戦や坊に

ひら道と志す

去斗は宗や次其日の出は

何時に傍きて花やト

先づ肌もらけ

伽羅の匂や肌事へ

叩之志おとの鎧着て

態と甲けるさるり

みよりの髪を振り分け

黄金作之太刀をなす

平安城永吉の打たる

大身の鎧を携へ

々々出陣々々ありぬまは

宗次は

母よの母よこつたまの(か)

ふちの暇を流しにせむ

母よは只後々々々々

軟々々々々々々々々々

あ、親子の別はなと

何んか入るな

哀々貴きも賤い

子女思ふ道々速はな

情い思ひ知らずたり

方々〇〇〇〇〇〇〇〇〇

母よ母よ母よ母よ母よ

あゝ宗次への

合戦に値む

目

未練も事なほおぼふ

屍は戦場に朽つらむ

名は未代もおぼやうと

あも枯神のまらぐす

泣きわたりておぼやう

宗次は

兼て覚悟の事おぼや

何ぞ答へなむ

あゝ茫然として居らむ

振り分くる黒髪や

鎧の袖ははらぐと

乱れり有り有様は

宛然陽柳の雨に逢ふ

^{ホナ}春風に靡く風情あり

やうに古家に追付は

昔はちしき急ぎやう

けふは早

目

敷根の里小もろぬ半は

音に名高き

川倉薬師に参詣せんと

駒より飛び降りてやうおま

南無薬師尊と合掌し

け堂も礼拝して

一首の歌を連ねける

書き並ぶも形見と云ふや筆之跡

我は何ものはとふるらん

と

古家宗次を抱上げ

筆走も身も又井へ

板の表も下もはさま

まゝか

けぞ在の一臥小休

古家宗次諸共

合戦も好ん

堂の柱も筆も付けり

精代造りおたけ
目八

見かへ毎々

浚け袖々女まらけら

共々踏み出すお者草鞋

傳い合せりておの

きけり後々知らせけり

全 抄 段

去程小

古家宗次りて連斗

けりて急せりて

けりて早

庄内都々坪小お斗け

大平○○○○○○○○

柳川原々けりて

春田周在門道春大の連斗

十ヶ女めり

あゝ羨しし有様よ

御存之御方某残

内村半平

十四才の春の比ら

兄弟の契海うらすり

春は花

秋は月見に詩歌を吟

斗支の

勇力ある返を相励み

樂みけらん斗らすり

ふいふ到来

矢猛心之梓守

互に敬味方とさき分斗

く半平の才を上げ

淋お思ひ故

志和地の城主

伊集院嘉門之助に訴へ

御内の内村半平と兄弟の契故世にち

何卒一日の対面を教し預けりけ

生涯の本望方りと

思ひの程を深くまきしのみ

矢文を以て乞ひけりけ

母主嘉門を助け

いと愁心看の实情を感心

情あつて

け程柳河原かにたて

軟みある酒宴をせん

XXXXXXXXXXXX

何語るも暇もな

別れの贈り物

いさよの日のとる物身

あふもははに別れの哀なる渡川

夢源をたつめ斗は

誰の誠なる出ぬらん

よめけ古歌ふ

逢ふ時の語らんとすと思ふ

別れのあはれはあはれ葉

と

く半平の身や上は積るふ雪

清から思はけ道まの胸の暗

海舟のたぐ火小あらぬも

おはちのまきて螢大方

燃えそしちつがもあしと

かぶる鎧の袖を取て

かたぐいとほきけ斗は

坊家の昔下京斗を催

互小涙を流し

け柄を別まけら

山崩し△△△△
△△△△△△△△

敵味方とらまのぢ

△△△△△△△△△△△△△△
矢叫びの音夥しくやえけけ

△△△△△△△△△△△△△△
坊家の宗次諸共馬乗り

△△△△△△△△△△△△△△
鼻せまら敵に打向ふ

△△△△△△△△△△△△△△
坊家の乗りたる馬は逸お斗は

△△△△△△△△△△△△△△
思はず宗次二所斗り後まけら

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
よある木陰より早尾の者共五六人

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
宗次を見掛り

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
大晴み歎いおき美少年より

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
いし生捕りなりて

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
慰み物にせんく

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
大手は廣げて取つていりる

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
宗次大音あり

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
汝等如き者乎

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
け宗次のさきへくと

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
捕らるる物にけと

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
大身多鎧な馬の平首がりしん

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
みまの思ひ返しに

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
さち向ふ敵を睨みとけりん

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
三人突き伏せ薙き伏せ

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
車輪が如く戻り廻る

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
憎悪をよひしと執事ホナ

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
敵兵も今付叶ふ事とお思ひけん

△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△△
後に出して歸りく

△△△△△△△△△△ 五八

宗次之を見らじり

△△△△△△△△△△

最前之廣言も以ぬ

△△△△△△△△

臆病者も

△△△△△△△△△△

返せ戻せとわはしけし

△△△△△△△△△△△△△△

追ひけしと臆病神誘はす

△△△△△△△△△△△△△△

跡も具すりて逃奔しぬ

△△△△△△△△△△△△△△

△の程もはしけし

△△△△

宗次け

△△△△△△△△△△△△△△

朱尔そみたる大身の鎧を

流る水に打ち注ぎ
斬り息もすくみけし
△△△△△△△△△△△△△△

吉田大將もあけ

黒革威之鎧も着て

五枚甲之緒をいん

重藤のさうと真中か抱り

昔のさうたる大甲黒の征夫を負ひ

月毛の駒の方と星判たのりたる

大勢方々のゆるり圍えら半

△△△△△△△△△△△△△△△△

大音あけて名乗る様

△△△△△△△△△△△△△△△△

吉田大井結衣とて

名を得たる強手の精相兵

△△△△△△△△△△△△△△△△

矢つぎ早々手利あり

△△△△△△△△△△△△△△△△

汝等よんどん身と

△△△△△△△△△△△△△△△△

半ハ騎は射て存す

△△△△△△△△△△△△△△△△

最早矢種もつぎめりけ

△△△△△△△△△△△△△△△△

群る散れ切つて入り

△△△△△△△△△△△△△△△△

丸目内飛頭秋忠の川入ホて

△△△△△△△△△△△△△△△△

待橋流の達人ホ半け

△△△△△△△△△△△△△△△△

右住左住に切り廻り

△△△△△△△△△△△△△△△△

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△今け敵兵もあま果て

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△手討の勝負は無用ありと

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△並しして撃ちつけり

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△痛付や古家

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△其身鉄石も非かれ

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△敵の放したる鉄砲も

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△胸板を打貫れり

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△遂に財部の朝の露も消えたり

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△惜まぬ者もあまりけり

△△△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△

△くさるゑに古家の郎黨
△佐藤兵衛公任は
△主人の死骸を有るべし
△味方の陣も退きたり
△宗次是を見つ

扱ふは坊家との

最早討死召承つるやふ

死あは一所と言ひなせんと

合戦の隙ありて後計はなすあ無念なると

其まゝ駒をとり下りて

古泉の死骸も抱き付き

打萎きたる卯やうの

中干 鎧の袖も乱斗影反

世にあらぬ内と言ひ替は

桃李は物を言はねども

今は最後の色見入る

跡も跡りもみち無きの

中干 散らも惜しめぬ太刀の柄

是迄ありと思ひおこ

武任もらけと言ひす

崩し△△△△△△△△△△

駒引界せいち乗りて

大音あけて呼はる様

△△△△△△△△△△△△

平田の正郎宗宗はと申す者ありと
 大身の鎧は馬の平首に打まはせ
 手巻の程を見せせとて
 面も振らす敵陣の中割つて入り
 常るを幸し突ま伏せ薙ま伏せ
 必死ありて戦ひけり
 向ふ敵を救多今ちとて
 其身も救てその疾を業のけり
 京も三五の村の空

替り行く妻の習ひいた
 方十のりのりの命を縮え
 骸は戦士よとら
 一陣の風も誘はすて
 遂に財部之朝の雲を消えにける
 今を盛りの花衣
 まに見る人
 鎧の袖を濡しける

全

参段

忠んままめ

新納む宿守一忠心えけ

文む二道一津一

和歌う道にも長たなまホリ

け及の戦にも粉骨がなり

八旬におん一りし

山田の地を攻めたり

比類おき働まありし兼て

秋軍卒之が勇を賞美

仁愛深之恩賞が懐け給たり

向ふお敵なき

皆我の手足を使ふ如くして

仮にも敵も押付け

見せたる例しおけ斗け

近も他もたのん斗おけ

勇之程があらまは。

大平の○○○○○○○○○○

之平ハチの進平ハチハチハチハチ

別けて寛平ハチハチハチハチハチ

富山平郎の○○○○○○○○○○

生年六斗リと打ち見エマ

容教無双の少年はらり

花やふるる鎧が着て

一陣ハ進み出て
天晴斗勇々表見えたり

敵の放る鉄砲ハ胸板を打ち貫ら

後ハ財部ハ草薙ハ怒と消えにける

之がけとより忠えは

早くも尋ずぬ問はきり

蘭鹿野の匂は消えやらす

達らもいん打ち伏して

玉の標ある勲也

忽ち消えそ雪霜の

氷の肌より渡る

姿×と×さ×り×て×あ×ぢ×ま×お×わ×

朝小

紅顔あつて古跡に誇り

夕小の骨と作て郊原に朽つ

才斗は詩の心小茂

中干 念ひの苦さ一り

夢さのたぐ草枕

寝故斗髪は打ちこけ知

姿とありてあた 夢の

××××××××××

干草ふすたく虫の音

泣く一死骸を埋めん

余の心の痛けり

一首の歌は連ねける

昨の追誰の手杖に故きけん

蓬の木小うらら黒髪

追善を借し給ひて

手向の水ぬぐすそ、井

暫く回向をふりたける

吉斗付形見の桜

誰のけ里に植えなまき

を財部も白ふらん

見るとかた人

まらぬ袖にあまりける

崩し折れあする陣

山田安永志和地の城

合戦烈しく

たかこいさの

いのみが削る鏝音の

真く駒の足運び

揃て兼たる敵味方

命はちりとも軽く

我の金銀もも重く

死骸の上に乗れ城へ

我後きりと戦ひて

何時果しき軍も是にたける

△△△
△△△
△△△

白石水仙の姦計はおちいり
△△△△△△△△△△△△△
味方之兵も数多松一ヶ寺
△△△△△△△△△△△△△△
今くく上旬

森向少陣を移せ世路
△△△△△△△△△△△△△△
志和切の城をより囲み
△△△△△△△△△△△△△△
昼夜城分たす攻弁斗は
△△△△△△△△△△△△△△

先づ第一当に

島津市務少輔忠豊
△△△△△△△△△△△△△△

喜入根津之守忠以
△△△△△△△△△△△△△△

樺山權左門之尉久高
△△△△△△△△△△△△△△

山田正藏押川隆兵衛
△△△△△△△△△△△△△△

村尾源左門松方少初之助
△△△△△△△△△△△△△△

物尔則才たる屈音之兵共
△△△△△△△△△△△△△△

弟ちを幸い
△△△△△△△△△△△△△△

大城詰を切て廻斗は
△△△△△△△△△△△△△△

打たれぬの教をす
△△△△△△△△△△△△△△

まゝ
△△△△△△△△△△△△△△

△△△△△△△△△△△△△△
 兵糧の道は断たばは
 大干の○○○○○○○○○○○○○○
 飢及ぶよの救あらず
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○
 吉斗の内府公
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○
 庄内一乱の起きたるに
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○
 和入甚兵赤本友
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○
 台勘兵主三郎人吉下下
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○
 和睦降参すしきより控あらず
 け時中心真付
 都の味はな角心のたえけきと

十二の客も這半袴掛及び
 日と兵をあらわし
 あ

御計はつき果したる折柄おす
 ありとあはる控ありと
 かの
 志と大公の御前にお出り
 降参の御
 後悔の色を隠し申す事
 公ツリ公

汝の罪深き事也

内府父の命トあり

まめけ

高家の門下也

祖先の勲功すまめけ

殺入刀活人劔之心故以て

死罪を寛免

一親友の知れを賜り

えの如く居下と云ふは

忠と真は雖有御意は蒙り

頼りて居る所を下りけり

その後忠と真

日州望風の四ト

やつき果て居たり

茲に穆佐の士

押川治右卫門

淵服平馬と云ふつて

望風の原に雄子狩り出でけり

ハ

押川ひびつ女雉子ね見掛け

ぬらひ詰るこいぢけらん

雉子たふけぢり詰つて

忠と真との真向をいぢる

其まゝ駒を夜を死たりける

ホ、その忠と真の罪科

天道未だ救さるるや

終りの程は年恐るるや

去斗は白石水仙は

忠真の及區城は道科より

陽州始良の郡服之に於て

獄門ホリけらん

若外あらず殺されける

去斗は忠と真は

譜代思殿の重臣とて

莫大なる恩に當り

御聲迄もあらず身あがり

如何なる天魔の入りぬらん

晴の程も知らずたり
田

まきり

薩隅日三州静に

治まらば代出さ目出度なり

櫻井之驛

昔ローカを思ふに

あはれなるに

山に花は雨の音に

たゞ葉はしるすに

此運ふに

あはれなるに

大平の

里木の

北山

防

衣之袖も五月雨の

中五

京まゝいもや嘆こふらん

ハ
ホ

ツサと西りすすーハハ

獅子は赤子を産みて板

中十

やうて鳥籠の裏より

雪千仞の溪ぞふハ

突き渡一三三気成す

あつたのちかの海を

次んか汝とすらん

幸は十歳にあまらあり

父のふたごのこいほ

耳のふたごは若牛や

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

あまのふたごはあまのふたご

ハ
ホ

代々尊厳を何すまふと

命を惜み

たまたまの年々忠義を

守りて

軍下を降るは

赤き父を

赤の子を

山一

生まぬ

金剛山と城枕

ひま龍つゝ戦

はまの中心

是れ中の孝

香はる秋の末

句ふたの

形ふたの

あといふ

其の中を

きりきりきりきりきりきりきり
おとがたのしんじゆん

毒饅頭

笑ひ女子女はあつた可い

怒り虎も恐ろしい

英萬一障色之豪傑也

きりきりきりきりきりきりきり

大平○○○○○○○○○○
おれ加藤肥後守清正は

知理の世に身をたす

目余計に世に騎へ

蹄の蹴るゝ馬方なり

醒めて戦果もあつた事

京に大閣をたす

吉駒の君はいつ

石田の世に

女す事をあつた

一役はたするは身体

捨て甲斐ある時や来ん

志士と仁義にあつき家康に

父のさし引せしむす

まのそ幼君も捨らむす

心けつた来はむら

流る愚神を捨てん

中干

一果てそ居たりける

たまたまのちまた京都なる

二糸の城に幼君の

あらせら斗ならその町ん

る供あせ一侍にん

豊島神代より供におく

中干

よそもてはく毒籠頭

毒はあつと家康の

股脛の臣を流し

まのそあつてはき先し

毒見あつとすはける

其真心はあつとね

いづれを取つて味しは

身体け目らん衰弱

と云ふ余命はあつらひ

命ある中々一は

最後の印目見えおひし

ゆゑに暇をまけらむと

片桐市へお且えと

と云ふ出仕をさしおひ

けし

幼君の秀頼公

XXXXXX
六年漸く印七歳

淀君しよそへ出せり

太閤の敵果おは

印他男ありしその後け

頼みまつたる印承し

何んをさすけお康々

威小忍まき事おる

あし

外中野のあつて

中平

いらみを含む一言に

坊正伏して申す様

御舞まては武名をけ

東へたるあまの果

中平

いそか忍び申す一牛

ふまゝ

外も望みはあまの身体

家康公と申し奉るは

に教もあつて大将

其ボの事付あつて

中平

千ふつと本末あは

大坂城の鉄壁に

おとらぬ程の且えあり

老けたまゝとあつて

他事も見守り申せん

弟一も走せ付け

寂き歸りしちり

巾をかすめ申せんと
九八

いと頼もしき言上中干

阿ふ言をいゆる女れぬ

大千の如く帰と叫ぶ

山はくすむす直に集む

心の上とち心は

心と思はれ下りて

まの頼公よむか向て

ふはとぞとせむは

多、且えの諫言哉

心實ると入りて

徳川よのた父君と

御恩 旅ひて冥東と

中干 候す言はひの世旅ふと

いと懇ろに申上りて

秀頼公はすれり

吟 節の言毎おは守りて

病の為し阿ふせは

最早はまゝに寝ておる。

病つゝのらな自づ。

見らるゝまゝに「いふなぢん」

「いふ待つゝのなるあふけ」

「さす中い寄せむく仰せらる」

「息を吐き出さむくぢん」

「側小仕ふる且之れ」

「さす居防ひ」定君も

胸中を限り裂れと思ひたて

「皆一同小俯もぬ」

果しあふけはぢんは

心だ息と取り直し

「中暇申して出けまは」

秀頼公け立たせらるゝ

爺中とくつと跡を追ひ

袖中が引まゝに泣き防ぎ

猛虎が挫くぢんは

幼き公の腕には

引のまゝへの座ホのり

秀頼公を抱き寄す事

頑是赤木秀頼公

いぢむ目元小指又

器後小すりの別まは

惜み指ふるちり付

やう形見の一日を

下賜は情心け

おも得たすば一拜也

あ

幼君のいほとま

慕ひ強ゆる情心

せいの心なむ

あらけや出づる光りな

君に仕あらん君

のあつたのにはち

斯くありて者と思ふなり

雲のくさくさ

馬のたえふけ身を志す
 晴ち花ふけ意なき人ぬ
 大子。樹三郎は幼作て
 父を失ふ。その母は
 なたらまらう。人さる。

十七歳も浪をある

後藤松陰も従ひて

文の林々奥深く

道より道も分け入りて

女事も遊ぶ程もあはく

高きその名は天知も

中干

ひま波りし人さるの

嘉永三年無米利加の

使節浦かた波り来り

破おちし。その日より

磯ノ浪の音もふるぞ

心騒々しくおのれも

皇女の心はなほおからず

鼎の湯もはてしなく

三樹三郎思ふ様

糧もはたけ都

も軍のたはるまは

軍兵もまを初ま

ふはるえん及ぶ

糧を求むと

今入る

謀事茂鳥のま

吾妻の司に女

つす心は鴨川

水の泡もなほ

三樹三郎はなほ

我罪は君の代思ふ真心

深からずしるせけり

黒田の親王の御流

持たる筆をくま碎せ

中々天をいらみたるあはる

はやは時をよかまは

の志あたるは浦多

港を鎖へえみ業を

追ひ耕たると唱ら斗

幕府は彼を語を入斗

のたまた市を笑ふ人

い争一は公論は

二つ小別斗身又の日々

蟬の歌をうらむしす

魯英その他之は思ふ

わすおらうり波を蹴り

打ち寄せ来斗は三樹三郎

はなれ予てあはるの

栗田口の親王

夜直と云く討草帯々

。二。

事と細とす一巻一

小簾が沖るは月夜

のたうぶかにあらすと

高妻の可つち早く

のらえより江がく送る

三樹三郎は途す。

返り貝の比惠の比歌書りナリ

我ら先はらふぬとら

口吟みつゝおきり

都をけあきし如駕籠人

神しこころしし人

あゝとらふ事大空や

月の光とてはすまはし

霞のふんせぬは

夜をけらるは時のかた

夜半をたははは

。三。

散るる浮世の習ひある

一一二

三樹ニあらも今は早や

運じたまふてあつらひ

教やけ入きと真心は

亦の目の本より末を

おもしろく玉とある

涙は袖にふるふと

くもくうりて旅より

月すゝもたをせしちん

つら箱根もあつぬは

當年意気欲凌雲

快馬東馳不見山

今日通途春雨冷

檻車揺夢渡函関

い

吟するあや雄々

つまはるふも恐ま

名に津下冥也

一一三

越ゆるみさく城守り 二日

隙り駒の足早く

吾妻の方に見付けさせ

獄更まじりていざいんマ

より罪状も私す

中干。三樹三ふぢを付けあり

秀仁父の遺訓をたねり

あつと筋に節王々

志きはいたくのみ

汝ホ心よのん入

早く眼をかれたし

はちやあにたし

すめららる子ねあむと

諫め事よそのぢ

文天祥の女昔

折すすたわらぬ熱も

んちあつてと思はれ

田知紀の詠一たる

足裏のすけはしめしめす

足裏のすけはしめしめす

と

いふはしめしめす

いふはしめしめす

さ

けいさめしめす

いふはしめしめす

虎を放つに果てす

いふはしめしめす

振手は早き太刀先の

まらぬきしめしめす

海第の原の草の葉に

おろ霜ふるはるむ

三樹の空があらたて

都の方を伏し拜み

排雲欲手掃天焚

失脚墜來江戸城

井底痴蛙過憂慮

天邊大月欠光明

身臨鼎鑊家無信

夢斬鯨鯢劍有聲

風雨多年苔石面

誰題日本古狂生

り

吟 終るや神世月

時雨に染みお葉ふる

たぐひあらぬ大井の

まじりてしるしこく

勢に安臥しちのこひり

十月せりのひかりは

惜じ一年はなす

照る白のたぐひたぐひ

まじりてしるしこく

けたる月と光と

行矣二章

故野口寧齋先生

其一

行矣雞林野

八道陣雲暗

臥雪驃騎營

凌波水犀艦

烟鷓萬竈屯

山響衆兵喊

腰間日本刀

遇敵可輒斬

其二

行矣滿洲野

三省陣雲急

鼓角動空城

劔戟滿平隰

樹皆飛丸洞

草皆鮮血濕

撤兵無一人

干戈可始戰

那夜市

干代之寺、夜の音、又の程、

續 本比寺、小敷盛、初江、

編 三六洲、餘余、秋の夕

之、降余命、戦上下、忠と勇

以、事長村者、誰かをり

物狂し、

下
松莊墨臣河内宗威海東
日本海之戰軍實錄七卷
王政復古以來史實似賦

續
蓬萊山千早振梅子枝
愛必七年之秋海道
下大和魂若木之榮
友千鳥志如葉忠貞
仰其也右白道瀆
澤陽和小松操市下

明治廿九年二月五日印刷
明治廿九年三月十五日發行

不
編纂者 宮田秋堂

許
複 發行者 又間安次郎

製
發行元 精華堂書店

發行元 精華堂書店

大坂市南區心齋橋筋安堂寺町西入
(電東三三六三番)

既刊廣告

上
金剛石、玉乳、玉髓、以形、
上之、特、楠、白、竹、山、白、淨、入、
之、小、楮、石、童、丸、吉、成、石、上、下、
危、常、陸、丸、錦、之、竹、板、

中
春之、摘、春、冬、月、元、月、照、
之、王、照、元、川、中、島、南、安、安、上、下、
危、軍、印、楠、中、左、右、各、兵、各、事、物、決、
松、吹、口、迷、法、と、等、一、軍、印、廣、張、中、左、

